



うたそら

第
6
号

2022
January
1

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「暮らし」	26
一首評 「そらよみ」	34
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	36
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	38
次回予告・編集後記	39



青藤木葉 @konoha_ao
あき子 @ponko_san
麻数 @umberhemp
麻倉ゆえ @AsakuraYue
アダムス理恵 @Adams_tanka
阿部蓮南 @renat815
天野うずめ @uzume_no_hijiri
雨虎俊寛 @amefurash13107

有村桔梗	@chattencire_k	潤井戸	@kareido1111
歩歩	@subperf	河岸景都	@kate_kawagishi
五十子尚夏		菊池洋勝	@kikutig
池田竜男		北村美晴	@kame073
石川順一	@Hitler57	君村類	@kmmr_r09
五ッ木居家	@yunosuketanaka	久助	@nTbBm64shitlap
宇祖田都子	@shimsyutu2020	くろだたけし	@tkuro2016
泳二	@Ejshimada	佐藤氷魚	@satohio_tanka
ㄣs	@hswelt	汐射ハルカ	@haru_c17h17c12n
えんごづけい	@clematisilica	紫苑	@purple_aster
大坪命樹	@OotsuboMeiju	詩季	@4kitanka55
大橋春人	@hachidx2	西鎮	@xi_zhen_ivUT
岡田濫	@kakomiyano	雀來豆	@jacksbeans2
小椋 杏	@ogura_anne	白石 夜花	@yohana_no_sekai
小崎ひろ子	@hitoritsukimiru	せいや	@petitchante
音平まご	@nandemonahi16	たえなかず	@suzusuzu2009
がね	@amicus08	多香子	

高橋良 @takahashi_ry5
探偵とホットケーキ @L_L_lawliet_
千原こはぎ @kohagi_tw
chari @greenchari2
月硝子 @gesshodo
寺阪誠記 @teratanka
堂那灼風 @shakufur
ともえ夕夏 @croissant_hey_z
中村成志 @nakam8
西淳子 @Jacky244Ray
西村曜 @nsmrakra
ネコノカナエ @nekonokanae_uta
野歌りん @Noutalyn
薄荷。 @aie0himeco
濱松哲朗 @symphonycogito
早月くう @k_hayatsuki
雛河麦 @may_spica_358

ヒブノ寿司マイク	@xtksbnR4ww1wj8M	悠佳里	@yukari_rito
廣珍堂	@Hirochin_dos	YUCAU/古都梨衣子	@_yu_ca_li_
福山桃歌	@momoka_fukuyama	ゆやゆき	
藤森岬	@xk5RX1A8F46kkn	ゆい	@b7282e_akaneiro
細川エリカ	@luvluvkasen	龍翔	@oppizuntsuan
真岡まな	@mayumi_ma_na	Redvelvetcake	@R_velvet_cake
まさけ	@mskpompomfuwa23	渡邊知博	
御糸さち	@MEATsachi		
深影コトハ	@cotoha_mikage		
衣未	@mini_4567		
宮岡 蓮子	@myao_rr		
深山睦美	@57577_77575		
虫武一俊	@mushitake		
六浦筆の助	@Tohakumutun5057		
六蔵めれう	@mereumumai		
村田一広	@mucc12022		
杜崎ひろく	@kousei_tsurun		

計83名
たくさんのご参加
ありがとうございます！

メリーメリー ツリーに星をひかせて人間たちは夜にかしづく
 やすやすと夜空は雪に覆はれてひかりの致死量はどれくらい
 さみしさを見据えるときミッフィーのまなぶたのなきつづらなまなこ
 琥珀糖ひとつと与へて浮かびくる冬の愁ひを黙らせてゐる
 生きてゐるひとの輪郭ばうばうとしてゆくやうに降りつづく雪
 真夜中の雪をうつしてしづかなる鏡の向かうに触れるゆびさき
 これからなにかはじまりさうな空の下わたくしは地球のこども
 寒空に右手を伸ばす 来年のわたしにバトンを手渡すやうに

バトン

有村桔梗

シドニーの午後20時の空ですとアナウンス流れ南十字座
 見つけたらしあわせというカノープス水平線に探しにゆこう
 寒空のバスターミナル 路線図に星座をなぞるようにふたりは
 ほんのあとすこし伸ばせば届く手をアステリズムの線でつなげる
 冬だけ僕がアルタイルきみはヴェガこのままバスは火星に向かえ
 バラ園か小麦畑か砂漠、星 たとえ不時着だったとしても
 瞬きを忘れるくらい次々と流星群のようですきみが
 雪のない空から雪が降るように冴える星々ふたりに積もる

アストロノウツ

雨虎俊寛



金色のピン

阿部蓮南

崩れかけたバウムクーヘンの模様を戻してきれいなことなんてない
 「純粋な空気」が存在しなくてもいい張り詰めていなければいい
 サニタリーボックスの外それだって人の内面 触れたら痛い
 幸せになるには桜の木を揺らせてことですか？それはリスキー
 ロックならかつこいい ジャズならおしやれ 私の音楽はなんだろう
 カメラマンになると涙は甘くなる 春が来る はじめまして甘雨
 創作をシェルターにして天井のLEDも温かくなれ
 正直になるほど君が謎になる金色のピン交換しよう

徒歩二分

天野うずめ

正常な位置に私は戻りたい昨夜の夢を忘れるくらいに
 君が先に死んだとしても名古屋には住んでるだろう 名鉄に乗る
 鮮明に移ろっていく冬の空また行けなかった公園がある
 週末はライトアップを見に行こう夜の葉はあとから飲もう
 白菜が一玉九十八円と報告したい君の目を見て
 バス停が徒歩で二分の場所にありときどき駅まで向かうため乗る
 工程が複雑なほど廃れゆく温泉卵はレンジでつくる
 ちょうどいい気温がなくて薄着でも厚着でもない服を着ていく

冬の舌 Tongue of Winter

五十子尚夏

〈II neige〉とあなたが言えば〈II pleut〉とわたしは零す、冬の渚に
 月碧く眼鏡のレンズに吹きかける呼気にも冬の色を見ている
 教会のステンドグラスを見上げつつあなたが見せている冬の舌
 アンドロメダ星立図書館はるかなる銀河にひかりの蔵書を零す
 睡眠薬に頼る眠りのなかに見るサマルカンドの青、アレキパの白
 タブレットの薄さに触れるさびしさにあらねど君の頬に触れたり
 ドライビンググローブのまま触れられて朝まだき冬の香に惑いたり
 これはまだ詩じゃないという感覚の渚に掬う月のしずくを

夢八夜

池田竜男

みずいろの傘は左右に傾いてしばらくかたい流しの蛇口
 帆柱にくぐられたいと先の世で不義に染まった力カオが苦い
 花というみずからめくるものがあると稚魚は近づき蓮の音聞く
 聞きなれない鳥のさえずりまねてるとカラスにやけて小銭を落とす
 奪われて歌わなかった歌を子は炎にくべて燃える白鳥
 熊を追い村に戻った頭領は子どもの足あとじつと眺める
 小さくてぐらぐらゆれる歯の上で大きい歯がもうゆれていない
 くちびるにゼリーのチューブくつつけてだれかがきたと立っているこども

「公園の中」

石川 順一

藤と松巨木であるが斜め向き小石踏む音を無効化して居る
ひよどりの必死の鳴き声木々に有り美しき藻を見に行く私
猫走る竹垣の中病葉が黄緑色に膨らんで居る
公園にユダヤ人は居ない朝の雪溶けるの早くてトースト食べる
食べ終えるミックスナッツ尉鷄翡翠に会える公園は良し
おせち来る今日は嬉しい大晦日悪評にドロップキックしてくれる人欲し
断弦は怖くは無く公園の地上絵何時の間にやら消えて
頂上はもう直ぐなのに猫逃げる小高き丘の四阿降りる

屋上獲部 VI

宇祖田都子

暗幕を張り巡らせた屋上に五年に一度くる回顧展
ワイヤレスイヤホンくらいの猥がいて耳へ入ってくる夢をみた
屋上に月の砂漠が鳴り止まず駱駝は西へ西へと進む
函という漢字にバクとルビを振る船乗りだった講師の TATTOO
バクという名前もいいけどピロティーという名前でもいいよね多分
先輩と猥と私を乗せたまま今を漂っている屋上
ピロティーに敷き詰められたピアノ力を踏まずに歩くヒトコブラクダ
わたしたちかさぶただよね象よりも鼻も尻尾も短いけれど

初雪

泳二

この町は 僕が生まれる前だった 冬のたび雪に埋もれていたのは
動物のような僕らが目を覚ます真っ白な二の腕の噛み跡
夜のうちに降ったのだらう冬空はびーんと張ったフィルムみたいに
足跡が黒く浮き出るアスファルトまだだれもこの町を知らない
真っ直ぐに北に進めば山があり君に似た少女が住んでいる
また降ってきたね僕らが灰色の空に向かってのぼるみたいだ
ドローンが雪の中へと落ちていく歓声に似た音を残して
君はまた寝ているだろう この町はたぶんもうすぐ 雪に埋もれる

ニル・アドミラリ

えんどうけいこ

「ん」を避けていれば終わりになることのないしりとりのように働く
さみしいと死ぬ動物に擬態してコートも脱がずココアを啜る
おいしそうに見える角度を探すうちおいしくなくなっていくグラタン
感情が動かないよう緩衝材としてのみこむ台湾カステラ
言わないで悔やんだことは一度もない ミッフィーちゃんはいつも正しい
手で合図すれば痛いと言わって歯科医院では素直になれる
明け方に冷めてしまった湯たんぽを抱いて誰かをまだ信じたい
まだ鶴に変えられていない折り紙の数を数えることが希望だ

季節の積み嵩

大坪 命樹

桜花妻の気鬱のころぎは優しき色にて撫で慰めよ
受話器ごし弱々しげなる祖母の声幼き日々を露けく偲ぶ
歳と云ふ障害には勝てざるものかな 部屋に歓喜の曲流せども
ウキスキーかつてともにぞ泣き笑ふきみに焦がれし青き味なり
古りぬれど晩夏に生きるきみとわれ八日目蟬のごとく燃えんか
人もなほ命にかへて歌ふやは 蟬の声こそ真言なるかな
むなしきに妻剥くグレープフルーツを齧る果汁の爽やかな活き
いつまでもこどものこここに祝ふ 母の傘寿に手作り書籍

黒光り

大橋 春人

年末といえば年末進行の 赤字の店をまだ潰れない
店長の同期は辞める岡山の（山奥らしい）実家に帰る
退屈な火曜の午後に警察に監視カメラの有無を訊かれて
制服は威圧してくる前科などないはずなのに手が胸にある
警察の腰のカバーの奥にある黒光りするもの、なんだろう
ただ朝の交通事故の映像を探していたりあの警官は
もう僕は森に帰ります冬眠に備えてチョコを買っていきます
この店は長男ふたりと一人っ子ひとりで七時までやってます

暮らしのチャンス

小崎 ひろ子

洗濯のできぬ素材のカーディガン砧のやうに掌で打つ
ハンドウオッシュと洗顔料を塗り洗ふ人の皮脂により汚れた襟を
冬の色としてシクラメンあざやかに薔薇色でも桃色でもないピンク
たぶん5℃の冷蔵庫の流れ作業で詰められたお節が届く
れんこんは先が見えるとかつまらない話ばかり思ひ出す休日
かまぼこを切つてならべて里芋をむいて暮らしといふは陽だまり
お仕事のための試験に「まだ」か「もう」かあぐねながらもするエントリー
あらたしき年の始めは何しやう空白の待つ明日の清しさ

冬のサボテン

がね

真夜中を縁取るような瞳から逃れられない師走の駅舎
寒空に置き去りにされたメビウスに嫌いの反対語をそっと訊く
唯一の方法として沈黙をシェアする西日に染まった部屋で
浸け置けば置くほど味が染み込むと教えてくれた人の鶏肉
生き延びてしまえるらしい月一で湿らせればいい冬のサボテン
せめてめちゃくちゃに涙が流れればいいのに6時半には起きる
アルバムの哲人と隣の哲人とを見比べている哲人の彼女
家具ひとつひとつにきみが染み付いて部屋のすべてが葉になった

懇親会

涸れ井戸

こんなにも坂多いのか代々木から参宮橋へテクテク歩く
グーグルのマップは毎度誤認するSOSのDM送る
看板を何で付けない？とつおいつ集まってくるディレクターは
詩と俳句・小説・短歌一同に会し懇親会の始まり
挨拶に応じる人と応じない人あからさまに分ける人も
詩の人と歓談をする鞆から自作を出されジャケ買いをする
即席のゲーム始まり酔ったからではなく真剣に面白い
二次会へわらわら進む肩つき合いながら坂道も楽しい

国境を

河岸景都

学校で覚えた読みを忘れては遠ざかっていく、海に向こうの
地球儀にこの指先で触れるとき小さな神を産んでしまった
遠くから私の国へ降りてきて消えてしまった天使の言葉
国境を静かに越えていくように飲み干していく異国の緑茶
英字だけ並んだ菓子裏側にそっと佇む市内の工場
深夜まで惰性でついたテレビジョン、辿り着けない土地の人々
あなたとの間にそっと横たわる国境よりも難しい線
新聞の一面飾る問題はメルカトルだけ知らない歪み

それらすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

介護度が上がり施設に居る暮しそれらすべてを抱いて眠ろう
国の白書には載らない暮し方それらすべてを抱いて眠ろう
暮しを守るエッセンシャルワーカーそれらすべてを抱いて眠ろう
暮しの手帳の表紙の絵の匂ひそれらすべてを抱いて眠ろう
暮し振りを氣遣ふ友の文の束それらすべてを抱いて眠ろう
障害児抱擁む不条理な暮しそれらすべてを抱いて眠ろう
寝起きする一晝あれば足る暮しそれらすべてを抱いて眠ろう
病棟の主と擲擲され暮す日日それらすべてを抱いて眠ろう

春は遠くに

君村類

臓器提供意思表示カードへとつけるマルより役に立てない
(殴れば、死ぬ)ステゴサウルの脳味噌はくるみのサイズだったそうだね
雪の降る国の言葉で「寒いね」は「あなたとはもう終わりです」の意
春が来るまでに恨みは捨てること深爪にせず爪は切ること
起きたなら寝ないと駄目だ人間は脳のすべてを使いきれない
食う前のみかんをやわく揉みしだく手に拾われる骨になりたい
そこまで、のそこがthereでもbottomでも笑う準備をしいてほしい
「寒いね」に「こっちへ来い」と返されて(たぶん)死ぬまで生きると思う

さよならネバーランド

久助

子を生まぬ女性がんになり易いと母に言はれて検診へ行く
問診を待ちをる間ホテル付き検査プランを熟読しをり
仰向けば診察室は暗くなりピーターパンの壁紙光る
縦横に乳房伸されて魂は面白さうにそれを見てゐる
ウェンディみたいになれない 貝型の裁縫セットはあげてしまった
魂をハンドバッグに入れたまゝすました顔でサラダを食べる
ブッラータチーズを崩す刃の上で検査結果を報告しをり
わたくしの体はわたしが守るからと言へり さよならネバーランドよ

北風

佐藤水魚

冬の雲見つめて歩くひとのいてもえる銀杏も雲の背景
不用意に心惹かれることもある周南冬のツリーまつりに
退き時は天啓のごと訪れる月曜ドンキのクリスマスツリー
年末の渋谷の街はわたくしを知らない人で溢れまばゆい
翼などないとわかって背に回す手は不躰に傷跡残す
北風にされるがままの風鈴を誰か助けてあげてください
寂しさが追いついてきてこの道を再び共に歩いてくれる
ヴォカリーズを延々と聴くもういちど交わす言葉の生まれる前に

白夜

くろだたけし

白夜にて夜を弔うビュッフェにはサンドイッチが平等にある
目覚ましのベルはこの先鳴りません夢と眠りは並走しない
眠らずにいたはずなのに音の無い夢が映画のように流れる
瞬きのあいまを抜けて飛ぶ蝶をつまんで食べる君の指先
背の高い花から道を尋ねられ「わたしは組み木のパズルのピース」
気を抜くとあらぬところに顔があり落ちた硬貨が希望に見える
いくらかでもサンドイッチはあるけれど枕を使うことはもうない
山盛りのポップコーンは甘すぎてポップコーンは山盛りのまま

七芒星

汐射ハルカ

あるひとのころざしから始まった泥炭地のこと峠路のこと
まだ雪が積もらぬままの師走にて前途を祝う本降りの雨
からまつと並木は寒くひともなく一町歩ゆく用水の跡
駅までの街路は広く真っ直ぐに頬映るゆき放射冷却
凍り水なかの蔵や路たちを素手ですくって売る母の暮れ
磁北へとまちを貫く堀がある流れをみつめるその橋の上
積年の絡む荊を断ち切って創世川に指輪を投棄る
陸奥のしのぶもぢずり海峡こえて畝を染めにし馬鈴薯の花

マシンのうた

詩季

発酵を急いではだめ秘密裡に記憶押し込む冷蔵庫奥
あの人が選ぶ車はいつも白どか雪降ってもつまらない白
ラジオから流れる匿名わたくしが隠したわたしを隠せずにいる
袖と袖ボタンを掛けて環を作る絡まないとは傷めないこと
レギュラーを降りたシャツたち寄り添った君も休もう赤いアイロン
真夜中に扇風機つけてくれる手にありがとうまでそよいでしまふ
大鍋の煮物の方が美味しいと騙されている少しの手間感
かざされた手に渡す熱ストーブは対峙して添う理由^{わけ}を聞かずに

メタルジグ

西鎮

裸のままのワイヤハンガーひっつけた窓ぎわに立ち朝日を仰ぐ
食パンにとろけるチーズのつけてよ、蕩けることは融けきらぬこと
フロントグラス乾きすぎるとワイパーがちよつと鳴くのは僕もおんなじ
ローバッテリーの携帯抱いて右胸はあの日のままの薄っぺらさで
自販機が三つならんでつめたゝいを誰もが抱えたまま冬をゆく
蜜柑ひとつ剥きながら待つ真昼間のあなたはいつもひとりを嫌う
歯ブラシのゆっくりひらく夜にいて暮らしてあともどりができない
海の匂い纏うことすらできぬままルアーケースに眠るメタルジグ

串焼きの鯖

雀來豆

大晦日父が囲炉裏の火を熾すぼくらと鯖が焙られてゆく
弟がいちばん最後にやって来て眠くないし疲れていないの歌を歌った
仏間に大百足来てかすかなる土の匂いす午後のうすやみ
デリバリーマン46自転車で夜の裂け目を飛び越えてゆく
祖父がいる囲炉裏の写真 そのとき鯖は頭から食べたの？尻尾から食べたの？
すこしだけ黙っていると叱られて嘔みしめている五分の孤独
真ん中の兄が囲炉裏の火で焙るうつつくしいノルウェーの牝鯖
ビザ頼む？ 僕はいいや（なれるなら蝸牛より自転車になりたい）私は頼もーっと

紅月の魔女

白石 夜花

さあおいで孤独に嘆く少年よ魔女と悪魔の晩餐会へ
理性など此処では無意味捨てなさい本能のまま喰らえばいいの
苦しみも痛みも全てチカラへと変えてあげるわ愛の魔術で
どうかしら？ 闇に堕ちてくご気分は甘美な声で鳴いてみせてよ
これでもうアナタも悪魔漆黒の翼広げて飛び立ちましよう
紅い月見守る場所で契約を結んで二人永久を刻もう
アナタなら魔王にだってなれるはずだって誰より美しいから
ワタシたちだったらできるなんだって創りましよう理想世界を

メンヘラブ

たえなかず

モンスターエナジー一気 ときめきを殺しゆくにはまだ早すぎる
ときどきは電話ください力作の書き置きだけじゃ物足りないから
地獄から来ているような顔をして遊歩道の猫に口笛
車窓から見える人びと 今生の別れに軽く手を振り返す
オムライスみたいにたまに食べられる私でいいよ、駅で待つてる。
渋谷駅もう雪まじり でもあなた光り輝く側のひとだね
優しいかどうかで言えば誰ひとり愛さぬ優しい恋人でした
長文のLINEする馬鹿泣いた馬鹿ともにゾンビになり朽ちるまで

椿の季節

多香子

うす紅の椿はわたしの頬の色あなたの電話が来ればほころぶ
その角を右に曲がれば海が見え、坂の下から君が手を振る
うす紅の衣まとおう恋の夜一番やさしい私をみせたい
やきもちを妬いて横向く窓の外ただ真つ白な冬が広がる
ゴシックの活字みたいに固い人、わかれの駅でふりかえらぬ人
雪の夜に貴方と食べるたらちりの柚子のきいてる出汁あたたかく
後ろから私の背中を押している「勇氣」という名の羽根もつあなた
自転車のきみの背中を目で追って坂の上には満開の椿

山形宮城往復日常

高橋良

日の長きころほひとり夕雲が蔵王の麓に残りある見ゆ
妻の身を通して胎児に話しかけ二歳児に姉の自覚は出づる
庭先の秋明菊の倒れしを摘みて家内の幼子に見す
国際的学校にてする運動会国籍混合チームにて競ふ
幼子は花笠音頭を唄ひをりわが祖母の唄ふ節を模倣し
陸奥一之宮七五三にて賑はへりわが幼子の来る年思はる
退職を決めし専門学校の中庭の柚子色づきにけり
晴天に風が吹きぬて銀杏の葉音を立てずに街路へ落つる

冬の底

千原こはぎ

話し合うことなく消えたひとの名をまだ見せつける予測変換
「離れたりしない」は守られないことば 初めからそれだけは知ってた
信じるってなんなんだろうざくざくと迷わないよう白菜を切る
離れたいひとは追わない ほんとうに好きだったから嫌いになろう
どんな日もかならず暗い夜はきてひたすら朝を待つ冬の底
まだそばにいるひとたちもたぶんまたあなたみたいに消えるのだらう
「だいすき」のことばがこわい聞きたびに嫌われる未来ばかりが見える
冬晴れにひとりで生きていくことを決めてころはしんと澄む湖^{うみ}

休職の診断書

chari

休職の診断書ひとつLINEする職場へ友へ妻へ娘へ
耳鳴りは放水ブザーの音に似て決壊しないように 瞑る
弱いから？意地悪だから？薔薇の棘 サンテグジュペリの答えがして
何ひとつ成さずに終わる日々たちに抗いて書くToDoリスト
行き止まり往路が帰路に変わるとき焦って迷路に陥りやすく
本当に大事なものは過ぎてから光るシステム止めてください
真っ白な5.5キロの犬を抱きたただ抱きつづけ終わる日曜
長月自ら命を絶つ者が溢れる蟬や向日葵や 駅

棄てられた神

月硝子

少しずつ民俗学にのめり込む記紀が隠した神を求めて
棄てられた神の御霊を啜りつつ廃社に咲き満ちる花手水
揺れやまぬトカラに思う今もなお国産み担う神の存在
掘り進む未知の地層の底深くぐんぐん伸びてゆく縄文期
『日本書紀』本文よりも膨大な註にくすぶる学者のバトル
その昔坊主が上手に国巡り日本の骨組み描いた行基図
宗教と民俗学の境目で座敷わらしが又隠れんぼ
廃材の山は新たな木々の香を放ち樹霊を大気に還す

おんじき

寺阪誠記

たまさかに読む『美味しんぼ』焼きそばがため友情のこはるるところ
過剰なるまでにコーラの害を説く教師をりにき昭和の末期
音に聞く天の羽衣このやうなものかメロンのうへの生ハム
納豆のタレのパックのいくばくの進歩に技術立国しのぼゆ
干からびし米ひとつぶは児の服の袖より出でぬ時空を超えて
第三のビール掲げてデイオニユス型の人らのつどへる路上
無回転寿司のにぎりは口中にかたちとどめず咽^{のど}をくだりぬ
珈琲をすすりをはりて一刻に消えゆくぬくもりに包まるる

ないけど

堂那灼風

水盆の世界を生きる 海がありそこに成された地の人々は
まじばねえやべえいみじくはなはだし語彙力あてどなくさかのぼる
あけぼのの屋根を万里をとび越えてさえぎるもののない果ての海
その淵をのぞきこむならどこまでも光があきらめる深みまで
うつむいていい視線は下じやなく地球の中心を見ているよ
最果ての浜に読めない横文字のボトルが落ちている絵 ないけど
客席に収まるほどのみんなたちみんな大好きパンジャンドラマ
僕たちの僕たちははって僕たちは誰だn年後の僕たちは

くろわさん、いよいよの冬

ともえ夕夏

震ふる 数字しか見ぬ大人らを黙らせるには数字しかない
クリスマスケーキをきちんと切る横で相似条件唱へてをりぬ
髪を切れば心の向きもかはるらし尾翼のやうな衿あしに風
受験料振り込む窓口のひとの眼鏡はともにお洒落なかたち
するすると問題文を読むやうに海老の入った茶碗蒸し食む
銀色のシャープペンシル窓からの日差しを跳ねかへすたくましさ
しづやかな部屋に加湿器は白く息はきつづけ過去問の旅
ともだちの選ばなかつた高校を受けるしつかり立つ子になつて

チエーホフの鈴

中村成志

またひとつ名に寂しさを纏わせて霜月ここに鈍色の朝
イーストの匂いは森の深さにて明日はパンとなる象牙色
風を受け高鳴る鈴かサハリンへ向かうチエーホフ、その櫓の馬
陽が射せばほの見えてくる道のりの「次」と「今度」の使用残数
背負うのも悪くないじゃない？真後ろへするり置かれた結びハンカチ
水の惑星土の惑星木の惑星鉄の惑星より生える瓜
呼吸器が息の流れを感じとるほどの寒気に咲いた山茶花
さあさあもうおうちへ行こう地べたなど氷のようにつめたかろうに

淀

西淳子

顔文字がいつも泣いてたきみだから会ってよしよししたかったんだ
ぼくたちは似ているとが多すぎて似てないとも多すぎて、淀
なでてあげるよ。きみが持つ傷痕のひとつひとつにあるエピソード
二人だどちよつとだけせまい浴槽に二人で入る体育座りで
おたがいにくうかはばつぐんだ！ではないポケモンバトルみたいなエッチ
レシートを見ては丸めてゴミ箱へ、見ては丸めてゴミ箱へをみる
AM05:30のドライブなのにコンビニとマックが暗い。ぼくらは眠い。
高速を走ればきみが遠くなる。遠くなるだけ明るくなる空

耳に入れない

西村曜

もうここは晩年だった焦げついた鍋から甘いバターのおい
人並みでなくても僕なりに浮かれてばらとケーキを買って帰った
花の名はばらしか知らない僕のためばらしか置いていない花屋を
でもきみが教えてくれた花の名をひとつ携え晩年をいく
サルビアが干からびている サルビアって干からびるん？と笑う 冬晴れ
性愛の苦さを何に喻えようたとえばモカにあるいは虹に
生きていることはほんととはたのしくてコーヒー豆を耳に入れない
将来の夢ならプリン・ア・ラ・モード 食べたいじゃなくなりたいと言う

雪の宴

ネコノカナエ

雪道をごとくごとくバスがゆく何か喻えているのね、きみも
雪道のゆはごとくごとくそれはもう目まぐるしくてバス酔いしちゃう
酔わずなら氷の盃一杯の冬の光を分けてくれぬか
つうりと雫を注ぎ注がれた雫がひかり乾杯ですな
靴底についてきたんだあちこちのバス停からの雪たち雪たち
あちこちのバス停からの雪がもう打ち解けあつてひかっているね
軒先の氷柱は五徳のごとくあり雪雲餅を焼いてくれます
雪道をごとくごとくバスがゆくきみらも歌を詠み合っている

アングスト

野歌りん

今晩はあなた帰ってくるかしら 私をひとりにする気なのかも
聞いたことない息遣いが聞こえる 誰かがそこで私を見てる
衝動が抑えきれない このままじゃいつか傷つけてしまいそうだ
暗闇に閉じ込められるあの時間のちに折檻だったと知った
無差別は実は差別をしているし色眼鏡なら皆かけてる
蹲りどんな痛みに耐えてても夢の中ではファンタジスタだ
手袋はなんだって隠してくれる 不安も期待も血の跡さえも
残酷な殺人鬼の映画を観てる 作り話のままでいてくれ

あなたの右手（うたの日十一・十二月まとめ）

薄荷。

この街は酸素がすこし足りなくてあなたの名前がうまく呼べない
日曜のふたりベッドで微睡めば離れ小島のような朝九時
ため息でわたしの頬をくすぐってごめんと笑う君のくちびる
悪戯なあなたの右の手の甲を飼ひ慣らすようにゆるりと撫でる
繋がれただけでは少し寂しくてあなたの左の小指に噛みつく
体温をゆびの先から分けあつて氷点下の日は少しぜいたく
ほんの少し昨日より爪が伸びていて昨日より少しきみは優しい
メリーゴーランドきらきら眩しくて閉じ込められたい冬の遊園地

反古空間

濱松哲朗

なめらかに会議了んぬ この委員真四角のふき出しもて語るゆゑ
もう黙つて見てをれば良かりしを不意に泉へ浸したくなる
ソーセージ一袋火にあぶるとき王とはろくでなしのみせしめ
奔る火をおのれのごとく眺めぬる危ふさに過去も未来もあらず
歩道へと窪み入りつつバス停の土地あり 一辺は人と接して
みづからを亡霊のごとく連れ出してひなたにひとつ影ある不思議
空間は視野の侵略、うすあをきねむりを反古のうへにのぼして
加湿器にふきあぐる息惑ひつつくだりつつやがて消えてしまへり

転入生、四十物さやか

ヒブノ寿司マイク

リコピンと呼ばれたいのよそろそろね苗字にさん付けから進みたい
ユッキーと呼ばれ嬉しい 男子にもおなじ名前の子がいるからね
何回も聞かれ慣れてる読み方を初見の女子がへあいものゝと笑む
コジーって呼ばれてるのに本当の苗字は小島でないことを知る
キムタツと呼ばれる方とただ木村とだけ呼ばれるふたりがいてさ
馬場ちゃんパパが床屋で他の子よりなぜだか顔が輝いている
クラスでは誰も知らない二つ名を持って周りとうしろだが
まりつかと僕だけ呼べず校門を出たらまりっぺ、まりっぺ、そつと。

メビウス

福山桃歌

この部屋の朝の終わりに怯えてるあなたが世界になった夜から
星だったあなたに触れるしあわせは青いひかりに溶けて流れる
くちびるに知らない名前の花が咲くいずれあなたに摘まれるはずの
美しいことばしか知らないからだ冷たい息に喉が詰まって
永遠を描いた赤い約束を解いて垂らす闇の底まで
何度でも呼吸は止まる落ちてくるあなたの涙が頬に沁むたび
あたたかいかけらを拾うこなごなになったのは何だったんだろう
この恋はあなたに殺してほしいからやさしい両手でとどめをさして

吹雪

廣珍堂

下校路は一面吹雪のなかにあり後輩底ひ駄を目指しぬ
国道にテールランプの並びたる吹雪の夜のコンビ二眩し
笑ひつつ裸足で吹雪の校庭を一周といふ罰ゲームありき
今朝のバス吹雪のなかで待つひとのコートの肩はすでに真白に
熟練のエンジンブレーキ操りたるボンネットバスの運転手ぬき
幻想のなかへと吹雪入り来て鏡花の家の前にあやかし
吹雪だし今夜はここに泊まるわと酔つてゐるだけの妹を蹴る
昨晚の吹雪は間^{あはら}を通り抜け窓台白き晴れの朝なり

アッサラームなばくたち

まさけ

ちっぽけな虚勢を張って日々生きるベビーサタンにぼくをみている
大人にもほしい呪文は少しありベホマにルーラそれとメガンテ
この世界半分やると言われたらおそろく僕ははいを押してる
お客らをバーサーカーのように狩る営業二課の武闘派田中
大仰なアッサラームの商人のように上司にへつらう山田
「あなた わたしに くびつれといえますか？」言わないけれど思ったりした
水面に映る世界が眩しくて旅の扉とみ見紛うている
戦場のようなこの世を生きるためドラゴンクエストマーチで進む

さかいいめ

御糸さち

まるぼうろ 世界に隅があるとしてルンバはたどり着けるだろうか
降りそうで降らなかったな曇天の夜は朝方より明るいな
しじまなるおおつごもりのテレビではマツケンさんがきらきら踊る
ほそくながーく生きたいですかーのびぎった蕎麦はぶつぷつ切れて 鐘の音
あけましておめでとー！さっきといまの境目を行ったり来たりして
ちやくちやくと西の暦はふりつもりふりつもりして二〇二二
お年玉もらえる歳じゃなくなつてだからこそ楽しい楽しいね
ふうくれえ 世界に罪があることを忘れてしまいたいよブラーバ

うしかうとうへ（隠れているよ）

深影コトハ

うしなつて初めて気づく熱だった予報になかった初雪が降る
どうしたら正解だったか分からずに連絡先を一つずつ消す
喰らうしかなかった毒が黒髪をますます黒く染めてゆく冬
わたぼうしの奥で静かに咲く紅に触れないようにいいねを押した
見つめ合うしあわせを信じ込まされている人たちの通知は切った
いいんだようしろの正面誰だつて敵になるなら斬り払うだけ
決めたのにどうしても捨てられなくてバンザイさせてゆくぬいぐるみ
とらえたと思ったらまた逃げてゆく心の晴れ間を明日に願う

12月の雑司が谷公園ブルース

宮岡蓮子

行きつけは神社、古民家カフェ、霊園。半透明の隣人もそう。
パンもない寂れたスーパーなんだけど、ばあさんが出す総菜はいい
裏路地を真顔で進みゆく君はもうずいぶんと迷ってきたのか
酔い醒めぬうちに歓楽街に着く蟻地獄的界限に住む
漱石の墓前であつても手をつなぐ ここで共には眠れないから
谷底へだらだと人を運んでるかわいい名前の小さな列車
穏やかでとてもいい街だったよね、君が越したら用はないけど。
雨の昼あるいは夜の思い出に憑りつかれている我が雑司ヶ谷

誰かの前座

深山睦美

しきたえの腕に凭れし我が心掴めず虚しいあなたのまくら
店の奥 車道の反対 あなたには自分で決めた上座があつた
割り勘を一枚二枚と数え出す 六枚くらいで逃げ出す私
記念日と同じ並びの時計見て今何時かと無意識に問う
同じ手で愛し傷つけ飯も食うすごいセンスをお持ちのようで
誕生日ケーキのロウソク吹き消して暗闇に浮く死神の顔
杯中の蛇影 蟒蛇と信じて、呷る 現実になるといけない
いいサゲが思いつかない私らに こころで一粒、涙が怖い

持つことを選んで歩く

虫武一俊

草笛を吹きたくなるほど伸びきつたこれを刈りきるまでの夕映え
無関係ではなくダンスに必要な段差以外は均されていけ
眠れずに見る天井のざらざらのまま顔面に落ちてきそうな
雨に息 最中をふたつに割るときにあんこがねねつとして離れゆく
すべてわかつたつもりの笑いがこみ上げる冬の三角州に立たされて
持つことを選んで歩く道に咲く青白い冬の光の花よ
雨樋を溢れる雨の暴力の極めて規則的な間隔
あこがれた氷の城の崩されてその池を吹く風のきさらぎ

CMに想う

六浦筆の助

「従業員百人載つても大丈夫！」アベノマスクを詰めた物置
「思うほど悪くないよ」と吾の人生慰めているビールCM
夢ひらく「きのこ」「たけのこ」「明治チョコ」、歌はテレビの底に沈んで
浴衣着て竜宮城に行く夢はこれだったのか伊東のハトヤ
「天国と地獄」のリズムで仕事してふと口に出る「カステラ一番」
白銀の大地と家族のぬくもりが長年溶ける「ハウスのシチュー」
帰省せず暮れもこまれる人々にAmazonの箱歌う「ふるさと」
平和つて赤・青・黄色の灯がともり色んなCM流れてること

満月

六厥めれう

お前では話にならんということを説明下手の人は言うなり
二年前忘年会をした店を地図で探せば閉業の文字
山手線つぎに京浜東北線 二頭の犬がともに駆け出す
ホームドア設置されれば挟まれる確率もまた二倍に増える
年寄りが優先席に座るよう送り続ける念が効かない
よもすがら歩哨となりて佇つときに歌のころはぐつと遠のく
満月と信じて仰ぎ見たものが下水の蓋の穴と気づいて
新都心高さを誇るようにして赤いランプはぼうと燃えたり

向日葵と向日葵の油絵

村田一広

チーズケーキに包丁動きまん丸が人数分の三角となる
殻割つて落とせばフライパン全面に広がつてゆく（何の卵だ？）
パンたちが早起きをする仕方なく主はつきあつて店開ける
オレンジの夕陽まみれのあなたの背おもてに回ると顔は真つ暗
夕暮れになるのを待つて呼びとめる君がやうやく君へと戻る
群衆を僕の周りに音も無き寂しさとして配置しておく
新聞が明日も来ちやふ読み残す文字は畳んで闇に葬る
地下室の人工太陽十二月の向日葵と向日葵の油絵

深夜行々

杜崎ひらく

何もかもバカらしくなる夜がありコンビニエンスストアは灯る
昨日より少しこちらを向く月にあらん限りの願い事する
十二歳 海に落とした飴玉を頬張るように前を見ていた
十五歳 星月夜には脱け出して牛丼食べるのが趣味だった
流星のかすめる音のして僕は受け取ったのだあなたの言葉
真夜中に降っていた気がした雨の隠したものは何だったろう
まっさらな朝が僕らのために来る夜にしたいキャンパスとして
東京で風の在処を探るうちあなたといつか夫婦になった

冬の街はきうめいて

悠佳里

街中がイルミネーションで輝いてマスクしてても笑顔とわかる
知らぬ間に戻る日常人混みに流されてゆくベビーカーと私
子連れてジパンで歩くこんなにもさみしい気持ちになるのはどうして？
世の中は私がいなくても回る 家の周りをくるくる回る
子育てと家事に追われる毎日とこんなに近くてこんなに遠い
コロナ禍でなければ違っていたのかな大人に会わずに過ぎる毎日
化粧してスカートはいて出かけた 日も夫は帰りが遅い
確かめるように何度も囁いた 君はかわいい 君はかわいい

待ち針

ゆりこ

二十歳過ぎリカちゃん人形欲しがった子は新しいミシンも買った
リカちゃんを脱がせるパンツは穿いているブラを着けてよ五年生でも
胸板が結構厚い でもリアルではない胸に配慮を感じて
オリジナル型紙をひく子は皆と同じを避けるアーティストゆえ
縫い上げたワンピースには百均のレースを重ね重ねて重ねる
失敗をした子へ語る「また縫えばいいよ、時間はたっぷりとある」
我も縫うコートに付けた十字架に刺された気がしたクリスマススイブ
かわいいと互いに褒める残された二人の時間はそんなにはない

ザ・ニューワールド

龍翔

新しき世界に入りぬ 《ザ・ニューワールド》といふ名の居酒屋ありて
ささやかな乾杯をせり あたたかな出汁の注がれたちひさき杯で
最近はどう、と互ひに問ひ合へばポテトサラダのほのかに甘し
お目当てのポテトフライはほくほくと銀のボウルに盛られてをりぬ
凍結の話聞きつつ摘まみたる茗荷とカリフラワールのピクルス
おほきめの皿が欲しいと次々に小皿並べてきみは言ひたり
手羽先の肉と骨とを引き剥がし考へる遺産のつかひみち
メッセージ書かれてゐたり コップには《承認欲求強め、割と》と

今日も会いたくて

YU CALI / 古都 梨衣子

終電をわざと逃したあの頃は駆け引きさえも楽しんでいた
改札を抜ける音だけ寂しげに聞こえてくるな午前5時半
「わたしです」寂しい夜にダイヤルをまわす一人で貴方に向けて
毒薬は口移しして吞ませてよ来世も共に過ごしたいから
夜明けまで愛し合っても虚しくて重ねる度に薄っぺらくなる
真夜中のシーツを越えて体温が私より高い君に触れたい
触れたくて齧って撫でて微笑んで君を食べたい、そういう意味で
背伸びしたわたしにはまだ早すぎてガラスの靴は今日も似合わない

夢の狭間

ゆや ゆき

突然の大雪犬と外出れば散歩を拒みわれを見上げる
雪かきを終えたそばから積もってる凍るつま先汗ばむ背中
うんざりとするほど積もり匙投げの獣道めくゴミステーション
長靴の上まで埋まり長靴の役目果たさず長靴濡れる
遠近感さえも失いよろめいて新雪の中人型作る
雪を踏む音だけ響く帰り道吹雪いていても日暮れは青い
雪煙舞い上げながらダイブする犬の体は雪に溺れる
除雪車は夢の狭間で動き出すぬむらないひと月は見えている

白

渡邊知博

まあつくらしいんしんゆきゆきゆきしいんしんゆきゆき……こおり
起き抜けに公園に行くしんせつを食べていっぱいいっぱいらしい
噴水はすっかり涸らされ積雪の重さに耐えて立たされている
火事のごと怒鳴られている幼子の目に光源として水滴
私とは視点、客席に隣にされた眼球としての生
まっしろなしずかなせかいに赤々というづけられていきてるよゆき
目の前でただ起きている出来事に雪がちらつくゆきがちらつく
ひつじ雲貫いている光線よ罪ふかきひとを照らし出して



テーマ詠「暮らし」

◆ マグカップ二つ並べて僕たちが暮らしになるまでお茶にしようか
◆ 別々の週末となりあのひとはどうしているの、とカレンダーが
◆ 鏡にも意地張りたくてへこませた腹に自分を騙し朝風呂へ
◆ 穏やかな日々を目指して生きるため大きなことを諦めていく
◆ 握らずにいる手のあわいに子が入りてビルの谷間に吹く春の風
◆ きみらしくていいんだけどパンの耳ついたまんまの胡瓜のサンド
◆ ていねいなくらしつて何？ふかふかのホットケーキが何枚焼ける？
◆ 今日までにあつた出来事の全部が少しだけつき出した唇
◆ 「レターパックで現金送れは詐欺」という神託オラクル 詩集の届きし朝に
◆ 右腕の子の左腕のぬくもりと上の空にいて、耳朶を引かれる
◆ 暮らしにはビールが必要雪が溶ける速さを思ひ善哉食べる
◆ 空席をながめていれば吸う息の味が薄くてテレビをつける
◆ カレンダー掛け替えるたび壁面に画鋲の穴が増えてく 暮らし
◆ 玉ねぎがたくさん届くAmazonの人は「Amazonでーす」と甘い声で

◆ 青藤木葉
◆ あき子
◆ 麻数
◆ 麻倉ゆえ
◆ アダムス理恵
◆ 雨虎俊寛
◆ 有村桔梗
◆ 歩歩
◆ 五十子尚夏
◆ 池田竜男
◆ 石川順一
◆ 五ツ木居家
◆ 宇祖田都子
◆ 泳二

◆ テーブルにパンのかけらが残つてる昨日もここで君と暮らした
◆ 単純な暮らしを好む雨の降れば時計のねじを巻くだけの午後
◆ とりとめのない失望にも予兆にも生きてはいるねとあのひとはいう
◆ 焦げ付いたグリルを磨き終わったら料理の腕も上がる気がする
◆ 年末は暮らしのチャンスと筆筒の防虫剤を取り替へて昼
◆ 見える星だけで星座をつくるごと残りもの組み合わせでごはん
◆ 寝る 起きる 食べる 働く 食べる 寝る ……………
◆ 予報では晴れらしいけど仕事だし物干竿だけの日向ぼこ
◆ ドラマにはならない程度に丁寧暮らししてゆけば美しい日々
◆ できることだけして暮す人の手の届くところに全て揃へる
◆ 餓鬼ですら丁寧暮らしするというだけ私はズボラな暮らし
◆ めいっばいひらいたせいで手のひらの隙間を抜けるふたりの暮らし
◆ 北の地に暮らしすことのみ知る人のアカウント消ゆ雪のごとくに
◆ 手の荒れる水仕事には15%オフクーポンパーは使えませんか

◆ 大橋春人
◆ 岡田濫
◆ 小椋 杏
◆ 小崎ひろ子
◆ 音平まど
◆ がね
◆ 涸れ井戸
◆ 河岸景都
◆ 菊池洋勝
◆ 北村美晴
◆ 君村類
◆ 久助
◆ 佐藤水魚



テーマ詠 「暮らし」



朝なのに夕暮れみたいこの部屋はみのむしは棲むもうはや四年
ひたひたと国をおほへる憂きふしに年の暮れなる「共助」あれこれ
ふるさとに納税をするふるさとが国がわたしが優しくなるよう
ジャムの蓋をするりとあけるひとと住む暮らしの底によこたはる鳥
俺俺とだけしか言わぬ人だけど騙しているのはいつも私だ
昼下がり一人お庭でティータイム気分はまるで英国貴族
就活もホームシックもやけ酒も見守ってきたダンスを捨てる
麵するふたり いつかは遠のいてゆくんだろうな、お水ください
かぐや姫もし現代に暮らしたら月の迎えはUFOかしら
改めて東京事変を聴きながらわが浪費癖をかへりみなしむ
あなたとの夜はこんなに変わったわ 先に寝落ちた貴方を見つめる
十五日飾って捨てるために買うしめ縄飾りをさみしく選ぶ
「換気せよ」「黙浴せよ」の貼り紙にイエスも風呂で笑い給うや
攻撃に曝され息も絶えだえの Google に訊く夜の献立

- ◆ 汐射ハルカ
- ◆ 紫苑
- ◆ 詩季
- ◆ 西鎮
- ◆ 雀來豆
- ◆ 白石 夜花
- ◆ せいや
- ◆ たえなかず
- ◆ 多香子
- ◆ 高橋良
- ◆ 探偵とホットケーキ
- ◆ 千原こはぎ
- ◆ chari
- ◆ 月硝子

「子供連れ可」のレストラン食べログに妻のスマホが探る真昼間
たまごたまご四つもわれてしまひけり暮らしにひそむちさき絶望
リビングの所どころに落ちる灯のこれは食べても良い夢の部位
「ただいま」とドアを開ければ静寂が子犬のように飛びついてくる
らんぎつな暮らしの果てに掃除機で服の埃を吸って着ていく
今日もまた明日と暮らしを繋ぐため雑穀入りのご飯を炊いて
明日の朝食食べるおいしいパンを買うそんな速度で暮らしています
歩けますなんとかやつてる大丈夫 回覧板が知らせるものは
年暮るもほこりの部屋に座せしままひとり暮らしはどん兵衛の息
しまかぜが吹きひのとりが飛ぶまちで空を向く子のまなこまぶしい
わたしたち愛と平和が足りなくて真顔で食べる酢漬けオリーブ
毎日がコンペイトウの万華鏡きれい、たのしい光が揺れる
マイナスをゼロに戻して日が暮れてまたマイナスにしている日々
同棲し知った互いのあれこれをジェンガみたいに慎重に積む

- ◆ 寺阪誠記
- ◆ ともえ夕夏
- ◆ 中村成志
- ◆ 西淳子
- ◆ 西村曜
- ◆ 薄荷。
- ◆ 早月くう
- ◆ 雛河麦
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 藤森岬
- ◆ 細川エリカ
- ◆ 真岡まな
- ◆ まさけ



生きるのがどうしても下手 楽天のポイントをまたもらいそこねて
 不便さの波状攻撃 満天の星の襲撃 田舎で暮らす
 白菜をサクサクサクサク切り分けて一人で暮らす冬を楽しむ
 「ていねいな暮らし」を実現するために金が必要なのさ週6勤務
 俄には信じ難いがハロウィンで渋谷に来る人にも暮らしあり
 新しい暮らしに馴染むまで帰路に買うとりどりのシュークリームを
 朝起きてトイレに行って食事する 介護で気付く暮らしの基本
 静かなる On your mark 明け方にあなたとふたり目覚めるような
 人々の暮らしを思うバスの中誰もが揺られ明日へと向かう
 少しずつ減らす暮らしをする母がいつも荷物に差すポチ袋
 わたくしはひびわれやすしワンルームにはクッションのあふれてゐたり
 「閉店」の 張り紙を見て立ち尽くす 毎日お昼に食べてたラーメン
 朝起きて朝起きるために働いて朝起きるために寝入る 死んでいる

- ◆ 御糸さち
- ◆ 深影コトハ
- ◆ 衣未
- ◆ 宮岡 蓮子
- ◆ 深山睦美
- ◆ 虫武一俊
- ◆ 六浦筆の助
- ◆ 杜崎ひうく
- ◆ ゆや ゆき
- ◆ ゆりこ
- ◆ 龍翔
- ◆ Redvelvetcake
- ◆ 渡邊知博

||tanka|

きみらしくていいんだけれどパンの耳ついたまんまの胡瓜のサンド

雨虎俊寛

テーマ詠から拝借した
 短歌をもとにして描いた
 イラストのなかに
 10個のまちがひがあります
 見つけられるかな？

新春特別ページ

短歌で

まちがいがし

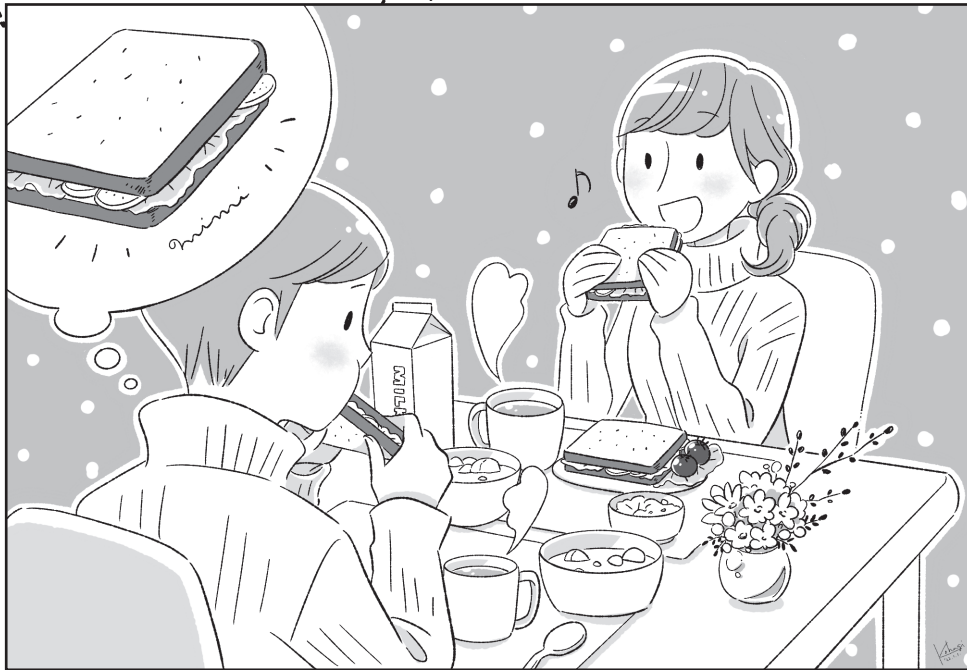


Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ねがひとはなにを下地に思ふべき例へば
葉を打つ雨の滴か

汐射ハルカ

不思議な歌である。願いを「思う」ことの下地。その例として葉っぱに当たる雨の滴が挙がる。その行動の平静さは、このような静けさを要求するのかもしれない。雨の音は、騒音を隠し雑念を鎮めるような気がする。だから、ぼつぼつ葉を叩く音を聞きその滴を見て、歌人は願いを「思う」のだろう。これは雨の滴に限らないのかもしれない。人それぞれの下地を見付けられ、誰しも願いを「思う」ことができるのではないだろうか。

一首評

大坪命樹

人間のこころの在り処ドーナツでいえば
おそらく穴のところに

西村曜

穴までうましドーナツ！シャーロット・カタクリの名言をついに口にしたくなるほど好きな一首。「人間のこころはどこにあるのか？」という問いの答え、もうこれでいいんじゃないか、いや、これがいいんじゃないか！と思つてしまった。「人間のこころ」も「ドーナツの穴」も存在しなくて存在するものでもないなあ。それでいて、どちらも欠かせないものでもあるなあ。これからドーナツを食べるときは穴まで残さず味わおうと思いました。

一首評

西淳子

「珈琲のはじめかた」って雑誌を買う帰
路で、ああ、もうはじまっている

西村曜

一読して強く共感した歌である。私も珈琲は大好きな質なのだが、そういうことではない。新しい事象に興味を湧きそこに向かつて行くときの、少しの不安と心地よさがないまぜになった、抗えないような心象が詠われているという点で、である。好奇心の「形態」と言ってもいい。三句の六音以外定形に収めながらも、句点を二つ配置し、効果的な引っかかりも生まれているリズムも、歌意にリンクした美しさがある。

一首評

西鎮

同じ豚だったのだろう同じ日に期限の切
れる肩ロース二枚

御糸さち

スーパーで肉を買い焼いて食べるまでを描く八首。笑いとアイロニーを丁度よい塩梅で散りばめるという超絶技巧。題材とは真逆の端整な作品。なのに少し切ない気持ちになるのはなぜだろう。引いたのは連作の三首目、軽みの歌かと思いきや、「同じ」の繰り返し、字余りを厭わず綴られた結句、とても丁寧に詠まれていることに気づくと、エスプリの奥に秘められた歌い手のまなざしはいったいどんなのだろうか。なんて思ってみたりするのだ。

一首評

雀來豆

成長痛みたいなものと言わなくて良かった
柘榴はおのずから割れ

和田晴美

成長痛は一般に子供が明確な原因無く感じる下肢への痛みだが、成長が理由ではなくストレス等が深く関わるという。この歌の前半は「成長に伴う苦痛なのだから我慢しなきゃ」と軽々しく口にしかかった自分に胸を撫で下ろしているのか。むしろ成長の果てに割けて沢山の果実を晒す柘榴の、ある種の無惨さ。その美しくもグロテスクな光景に、腰が引けているようにも読める。第四句の句割れは、成長と痛みを表しているのだろうか。

一首評

中村成志

かげろふのごと入管に死せるをみな「た
べたいです」とふ文を遺しき

紫苑

「かげろふ」の語に表される女性の人生に寄り添う手の無かったことが詠みあげられ、読み手はいったまそれになります。静かな絶望を突きつけられます。生きることとは食べること、食べことは生きること。それが叶わなかった人生、そこに至るプロセスへの切実な悲しみが歌に横たわります。何が詠まれているのか見当がつかない自分ではいたくありませんし、社会に刺さっていく歌の存在は大切にされるべきでしょう。

一首評

詩季

かげろふのごと入管に死せるをみな「た
べたいです」とふ文を遺しき

紫苑

テーマは「食」なのに、「たべたい」というひらがな表記。出入国在留管理局にいた非漢字圏の女性のことだとわかる。「かげろふ（蜉蝣）」と言えば、吉野弘の詩「was born」。「或日、これが蜉蝣の雌だ」といつて拡大鏡で見せてくれた。説明によると、口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても、入っているのは空気がばかり。彼女も胃の中には何もなくて、残せたものは訴えの手紙だけだったのだろう。

一首評

高橋良

姉さんはチョコ、妹はバニラ、わたしは
絶対に髪を切らないつもり

雀來豆

韻律における破調と意味上の飛躍、その両者を大胆かつ軽やかに成すアクロバティックの妙。「わたしは絶対に髪を切らないつもり」という下句は、（意味の上では）ともするとウェットに傾きそうところだが、一首が散文的に帰結することでかえって強い詩情を生み出している。「チョコ」、「バニラ」ということばの選択による抑制の効いたノスタルジーと、姉、妹との対比から浮かび上がる「わたし」の魂の絶対的孤独。

一首評

五十子尚夏



短歌リレーコラム 望遠鏡 6

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…

書き手

有村桔梗

テーマ

銘菓の名歌

先日、久々に文フリ参加のために東京へ出かけてきました(日帰り)。本当に久々過ぎて、いろいろ感覚が鈍っていたいへんな旅でした。

それはさておき、旅行といえはお土産。甘いものが好きなので、自分だけのためにお土産を買いますし、各地のお菓子にときめきます。

そんなわけで、短歌の題材としてわたしもよく詠みますが、他の方たちが詠まれたお菓子もついつい気になったり。

今回はそんな歌について、いくつか書いてみようと思います。

祖母の笹だんご積み上げられて一気に青が濃くなる五月
うたの日 2015年5月6日『だんご』
春野あくび

笹だんごは新潟のお菓子。売ってもいますが、各家庭でも作ったりします。旬は、五月六月のあたりでしょうか。

この作中主体の「祖母」もご自分で作られるのでしうね。目の前で作っているところなのか、遠くに住んでいる祖母が送ってきてくれたものなのか。

みずみずしく緑うつくしい笹の葉に包まれている笹だんご。「青が濃くなる」は五月の新緑のうつくしさと呼応しているようでもあります。

海までのゆるい坂道おりてゆく銘菓ひよこの顔つきをして

秋月祐一『迷子のカピバラ』風媒社

銘菓ひよこ。正確な表記としては「ひよ子」かな。東京と福岡どちらにもありますね。

比喻で、実際のお菓子として登場している訳ではありませんが、すこし上向いたかたちのひよこに、焼印で押されるつぶらな目。「海までのゆるい坂道」をおりるときにはわたしもそんな顔をしていそうな気がします。

阿闍梨餅置かれてゐたり春先の職員室のつくえの上に 野田かおり『風を待つ日』青磁社

阿闍梨餅は京都のお菓子。以前友人にもらつてから大好きで、先日は衝動的に通販で取り寄せたりしました。

誰かのおみやげの分配といった光景ですが、野田さんがおそらく関西圏にお住まいのことを考えると、旅の記念というよりは、「春先の職員室」ということで異動のための挨拶菓子的な意味合いもあるのかななどと思ったり(それとも、帰省してた人のおみやげという読み方が濃厚?)。

八ッ橋が真空パックされていて明るく元気なあなたに会いたい
伊藤紺『満ちる腕』

おなじく京都のお菓子・八ッ橋。おみやげの定番ですね。真空パックなので、生八ッ橋つぶい。上の句と下の句の繋がりはそれほど明確ではないですが、「明るく元気なあなたに会いたい」という主体のあざやかな気持ちも真空パックされているような印象を受けました。

徳島市二軒屋町の富士屋には蒸菓子小男鹿われの好物
谷川紀子『水晶橋』KADOKAWA

率直！

小男鹿は、こちらに住所まで詠まれているように徳島のお菓子。「好物」とまで詠まれているのでどんなお菓子なのかとても興味を引かれました。

書名の『水晶橋』は大阪にある橋で谷川さんも大阪にお住まいなのですが、ご実家が徳島ということで、むかしから食べていた馴染みのお菓子であり、いろんな思い出と結びついている感じなのかもしれません。

やがて無を纏ふあなたのかほつきと囁りと山田屋まんじゅうと 萩原裕幸「熟田津尔」

ぺんぎんぱんつの紙 27枚目 温泉

田丸まひるさんとしんくわさんのぺんぎんぱんつの紙27枚目の温泉(2017年2月発行)回に参加された萩原さんの連作から。

山田屋まんじゅうは愛媛松山のおまんじゅう。すこし前にたまたま某所で売っているのを見かけて、この歌を思い出しました。

同紙の田丸さんの連作にも登場していて、ちよつと(かなり)ドキドキの「山田屋まんじゅう」。温泉まんじゅうというアイテムが、作中の設定にほどよく効いていると思いました。

くるみからくるみ出てくる当たり前それがうれしい加賀の白峰 谷じゃこ バッテラ35号

秘めごとを蓄えながらつつがなく ねえ、きょうまでの萩の月たち 小泉夜雨 バッテラ35号

谷じゃこさんが発行されている短歌で遊ぶフリーペーパー・バッテラの35号「全国銘菓銘品ハンター」(2021年7月発行)から二首。

加賀の白峰は、金沢のお菓子。ググってみると、くるみ型の皮に煮たくるみが入っているようです。かわいい。今度金沢に行ったら買いたいです。「当たり前」の予定調和というか、くるみの形にくるみが入っているところの安定のうれしさを思いました。

そして、萩の月は仙台のお菓子。全国各地に似たお菓子はたくさんあるけれど、なんとなく本家は特別な感じがしますね。「秘めごとを蓄えながらつつがなく」歩んでゆく日々。「秘めごと」という言い方がかわいらしくて魅力的に感じます。

いつ食べようかと思っているうちに賞味期限を迎えてしまった萩の月。「ねえ、」という呼びかけからどこか萩の月とはその「秘めごと」を共有している感じがしてよいです。

さいごに番外で拙作から二首(完全なる文字数合わせ！)。

ゆつくりときみの中へと消えてゆく萩の月とふ菓子のあかるさ 有村桔梗

ほろほろときみしき夜に六花亭マルセイバターサンドよ、光れ 同

萩の月の歌は、うたの日の「月食」回に詠んだ歌。月っぽいお菓子を食べるとき、ついつい月食を思ってしまう。

そして、六花亭マルセイバターサンドは、言わずと知れた北海道のお菓子。北海道にはまだ行ったことはありませんが、六花亭のお菓子は好きで、むかしは母がよく通販で取り寄せてました。わたしも大好きです。

ひとつずつ包まれている、レトロな銀色のパッケージのあかるさが星っぽい、と思って詠んだかどうかは覚えていませんが。

どこかで銘菓の名歌を見かけたらお知らせください。

ああ、そういえばまだ、クルミツ子で詠んでないなあ…

次号予告

うたそら^{第7号}

連作欄 8首の連作 自由詠

テーマ詠欄 「淡」

一首評 「そらよみ」

短歌リレーコラム 「望遠鏡」

リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>



第7号^{メ切} '22 2/28(月) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「淡」1首

第8号^{メ切} '22 4/30(土) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「新」1首

編集後記

新年あけましておめでとう
ございます。本年も「うたそ
ら」を何卒よろしく願い
いたします。皆さまにとってこ
の一年が、実りの多いしあわせな一年となりますよう
に…！

さて、このたびは年の瀬の忙しい折、短歌誌「うた
そら」第6号へのご寄稿をいただきまして、ありが
とうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝
申し上げます。第6号の参加歌人さまは83名、連作
欄には61名、テーマ詠には69名のご投稿をいた
だきました。

今回のテーマ詠のお題は「暮らし」。身近なモチ
ーフを詠み込んだものから、暮らすということそのもの
まで、さまざまな「暮らし」の短歌が集まりました。
また、今回はページが余ってしまったため、急遽、一
読で情景が浮かんだ雨虎さんの短歌をテーマ詠からお
借りして、まちがいさがしのページを作りました。ちょ
とした息抜きに遊んでいただけると嬉しいです。

短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださ
ったのは有村桔梗さん、リレーエッセイは涸れ井戸さん
が書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそ
ら」をお届けすることができました。どうぞごゆっくりお
楽しみください。

また、「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちし
ております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お
読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は2月末メ切の3月初旬発行、テーマ詠のお題
は「淡」です。早春が淡く香り始める季節、たくさん
のすてきな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



しまじろう成人になり歴史には残らなくても超人気もの

涸れ井戸



三年前だったか。青空文庫関連のニュースで、
著作権の期限が作者の死後五十年から七十年に
なったのを見た。
本にも寿命ってあるのかな？と考えた。作者
が死んでから、五十年は生き延びる。ほんで
2018年に、新薬が開発されて七十歳まで長
生きするようになった、というイメージ。
自分が今年五十歳なので、シンパシーみたい
な感情が湧く。

角田光代さんに「旅する本」という短編作品
がある。新潮文庫『さがしもの』に収録されて

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

五十年

書き手

涸れ井戸

若いころは漫画家になりたかった。そしてプ
ランを立てた。二十代で、全国統一して、三十
代で中国やアジアを席捲。四十代で世界市場を
制覇。五十代でぼっくり逝くという人生計画で
ある。たぶん、太閤記に影響されてたんだと思
う。こういうことを学生時代、方々に触れ回った。
全国制覇というのは、ジャンプとかサンデーに
連載を勝ち得て、ドラゴンボール並みに売れま
くることが意図してた。世界進出のために、大
学卒業早々結婚してた文芸サークルの先輩の息
子・正くん(当時三歳)に家庭教師として付き、
英才教育をほどこし、四ヶ国語喋れるようにし
て秘書として雇うという遠大なプランも立てた。

神戸のジェームズ山に建つ先輩の家に、家庭
教師しますー！と押し掛けた。美人の奥さんが
鍋をしてくれた。四人で食べつつ、正くんと双
六をした。「ちまじろー」「ちまじろー」と双六
の絵柄の虎を差して叫ぶので、「これは、『トラ』っ
ていうんやでー」と優しく正すと、「涸れ井戸」、
これ進研ゼミの教材用のキャラクターで、しま
じろうっていう名前なんや。今こどもたちに大
人気やねん」と先輩が諭してくれた。ちまじろー
で、合ってた。結局鍋を御馳走になって、双六
をして帰った。それ以来、先輩の家には一度も
行ってない。

そして自分はうどん屋、金具屋、金型屋、漫
画喫茶、ラーメン屋などを転々とし、今は介護
の仕事をしている。ぼっくり逝ってないし、一
冊も本は出してない。正くんはその後すく
くと成長して関西の私立大学にストレートで入
り、射撃部に入部したそう。それが四年前に聞
いた話。そして今は…何の仕事をしてるんだろ
う？今度、電話できいてみよう。

The background is a solid teal color. In the upper half, there are several horizontal, wavy white lines. A large, multi-colored rainbow arches across the middle of the page. The lower half is filled with numerous white circles of various sizes, some of which are semi-transparent, creating a layered effect.

うたそら 第6号

発行：2022.01.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>